標点

特別支援教育からの学び

県教育庁特別支援教育課長
中村　誉

ずっと、「かっこいい先生」に、なりたかった。

小学校教員を目指していた私の初任校は、肢体不自由の特別支援学校（※当時は養護学校）だった。初めて担当した生徒は、重い障害のある高等部の男子だった。彼に残された時間があとわずかしかないことを聞かされていたが、コミュニケーションもとれず、何から手を付ければいいのかすら、自分の中で整理できなかった。文字通り懸命に生きた彼の一瞬一瞬を、共に過ごさせてもらえたにもかかわらず、教員として何を学んでほしかったのか、人として何を学び合うべきだったのか、彼を失ってもなお、当時の私にはわからなかった。それが教員生活の始まりだった。

次に赴任した小学校では、6年生の担任として、目を離せば教室から飛び出してしまう児童の手を、左手で固く握ったまま、右手のチョークを黒板に走らせた。言葉が出にくい児童のわずかな心の揺れにも、個に応じた指導の大切さにも、障害のある児童が通常学級で共に学ぶことの大きな意義にも、当時の私は全く気づかなかった。私にぎゅっと握られていた手は、心は、きっととても痛かったろうに。

次の特別支援学校（※同）には、毎日、シャツにビシッとアイロンのあたった服を着てくる生徒がいた。問題行動が激しい生徒だったこともあり、下校時には、服の汚れや破れが目立った。そのことをわびる私に、迎えに来られた母親は、「この子はいつ車の前に飛び出してしまうか分からないから、万一そんなことがあっても、せめて、その時に、服だけでもきちんとしておいてやりたい」と語った。明るく話す笑顔の奥に、哀しいくらいに澄みきった、深い愛情を見た。

私は何かにつけ、「後悔」が苦手だ。何だか先に続かないような気がするから。しかし、教員としての区切りを数年先に控え、これまでを振り返ることがずいぶん多くなった。特別支援教育も、始まりから十年以上経ち、広く理解されてきたように思える今、その原点にあった理念の真の意味を、改めて、丁寧に捉え直す時期が来ているように感じている。

「かっこいい先生」になりたかった、あの原点に戻りたい。いや、戻りたい気持ちも後悔も、少し先に延ばして、もう一度目指してみよう。特別支援教育を通して、「かっこいい先生」の姿を、描き求めながら。未だ、道、半ば。